

「聖霊が降る」

2023年12月27日

五旬祭の日が来て、皆が同じ場所に集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他国の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国出身の信仰のあつい人々が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、誰もが、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられた。人々は驚き怪しんで言った。
(使徒2：1～8)

過越祭、主イエスが復活した日から50日目の五旬祭（ペンテコステ）の日に、主イエスの弟子たちが集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から起こり、彼らが座っていた家中に響き渡った。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、集まっていた一人一人の上に留まった。主イエスがエルサレムから離れず、神が約束した聖霊を与えられるのを待ちなさいと言われた、聖霊が弟子たちの上に降ったのである。聖霊は風の音と炎のような舌で降って来たと言われている。聖霊は思いのままに吹く風のように、自由で、どこから来てどこへ行くのかもわからない（ヨハネ3：8）。そして、聖霊は言葉を語る舌、しかも、炎のように燃えている舌であると形容している。聖霊を与えられた人たちは、聖霊に満たされ、聖霊が語らせるままに、他国の言葉で話し出した。その話は神の偉大な業、神の恵みを賛美し、救いを喜ぶ言葉であった。五旬節のエルサレムには、あらゆる国出身の信仰の篤い人々が集まり、住んでいたが、激しい風の物音に大勢の人々が何事かと集まって来た。ところが、聖霊を受けて語る弟子たちの言葉が、集まって来た人々の故郷の言葉であるのを聞いて、あっけにとられた。人々は驚き怪しんで、「見ろ、話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてそれぞれが生まれ故郷の言葉を聞くのだろうか」と言い合った。ガリラヤの人たちが語っているが、その言葉は集まった人々の故郷の言葉で、語っている内容を即座に理解できたということである。

集まっている人々の中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、リビアのキレネ側の地方などに住む者、また、滞在中のローマ人、ユダヤ人や改宗者、クレタ人、アラビア人もいる。これらの国々は当時の世界の殆どを指している。集まった人々は、五旬節の祭にエルサレム神殿に巡礼に来た、ディアスポラ（散らされた）のユダヤ人たちである。彼らは自分たちの故郷の言葉で「神の偉大な業」が話されているのを聞いて、戸惑い「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。ここで、大事なことは「神の偉大な業」を語っているのを、理解できた、通じたということである。主イエスをメシア（キリスト）と信じた時、国境や言語を超えて、通じ合う仲間ができたということである。互いに理解し合った「神の偉大な業」を、ペトロは説教で表している。

しかし、ある人たちは、聖霊降臨の出来事を受け入れられず、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。聖霊降臨の出来事は言葉と心の通い合う、最初のキリストの教会の誕生で、それが、原始エルサレム教会である。聖霊は、主イエスをキリストと証しする言葉を生み出し、その証しに神の恵みと救いを受け入れ合う信仰を共有する力として、ダイナミックに働いたのである。